育児期にある母親の産褥育児肯定感と育児行動への苦痛との関連性

神 田 里 美・久保田隆子

The relationship between childrearing mothers' postpartum positive feelings toward childrearing and distress from childrearing activities

Satomi KANDA・Takako KUBOTA

高崎健康福祉大学紀要　第19号　別刷

2020 年 3 月

育児期にある母親の産褥育児肯定感と育児行動への苦痛との関連性

神 田 里 美[1)]・久保田隆子[2)]

1）西吾妻福祉病院
2）高崎健康福祉大学大学院　保健医療学研究科　看護学専攻　助産学分野

（受理日　2019 年 7 月 19 日，受稿日　2019 年 12 月 19 日）

The relationship between childrearing mothers' postpartum positive feelings toward childrearing and distress from childrearing activities

Satomi KANDA[1)]・Takako KUBOTA[2)]

1）Nishi-Agatsuma Welfare Hospital
2）Field of Midwifery, Department of Nursing, Graduate School of Health Care, Takasaki University of Health and Welfare

（Received July 19, 2019, Accepted Dec. 19, 2019）

要　旨

目的：産後 1ヶ月から 12ヶ月の，母親が抱いている産褥育児肯定感と月齢別育児行動への苦痛の実態とその関連性について明らかにする．

方法：A 産科クリニックを退院した母親に対して，産褥育児肯定感尺度の項目と育児行動の苦痛内容を質問した．無記名自記式質問紙調査を郵送法で行った．月齢間の分析（1～4ヶ月，5～8ヶ月，9～12ヶ月）は一元配置分散分析を行った．多重比較には Tukey HSD 法を用いた．有意水準は 5% 未満とした．

高崎健康福祉大学研究倫理委員会（高健大倫第 2823 号），及び A 施設院長の承認を得た上で実施した．

結果：有効回答 144 名（有効回答率 67.9%）を分析対象とした．平均年齢 31.8（SD±3.9）歳であった．初産婦は 73 名（50.7%），経産婦は 71 名（49.3%）であった．

育児行動への苦痛に思うことの内容について，月齢ごとに集計した結果，最も多かった苦痛の内容は，1～4ヶ月では授乳に関すること，5～8ヶ月では離乳食に関すること，9～12ヶ月でも離乳食

に関することであった．

一元配置分散分析を行った結果，産褥育児肯定感の各因子と月齢群にて有意差が認められたのは第 1 因子の「夫のサポートに対する認識」であった（p＝.024）．有意差が認められた第 1 因子をさらに分析するため，Tukey HSD 法による多重比較を行った．その結果，1～4ヶ月と 9～12ヶ月の間で有意差（p＝.031）が認められ，9～12ヶ月群の平均値は低かった．

結論：産褥育児肯定感と月齢群では，月齢 9～12ヶ月群で，夫によるサポートへの認識が最も低下していた．育児支援は，月齢が進んだ 9～12ヶ月の母親へ育児支援策を講じる必要性が示唆された．

キーワード：母親，産褥育児肯定感，育児行動，苦痛

Ⅰ．緒言

厚生労働省[1,2] の人口動態調査によれば，わが国の合計特殊出生率は平成 28 年度（2016）1.44，第一子出産時の母体年齢平均は 30.7 歳であった．服部[3] や大日向[4] は，近年の妊娠・出産・育児を取り巻く環境について，核家族化や兄弟数の減少および地域社会での乳幼児との接触経験等の減少，そして女性の価値観の多様化といった育児を取り巻く環境の変化について述べている．

また斎藤[5] は，新たな生活に適応していく過程で，自己の生活にどの程度の肯定感情を抱いているかを見ることが，対象者理解に重要であると述べている．

そして Rubin[6] は，産褥期の持続された疲労や，抑制された個人空間やまとまりのない時間といった産褥数週間にみられる疲労感や抑うつ感情，自信の低下の存在について明らかにし，さらにそれは分娩経験のない初産婦に顕著に表れると述べている．

旧育児肯定感尺度を使用して育児適応（育児適応とは育児生活に肯定的な感情を持つこと）の研究を行った田中[7] によれば，生後 1ヶ月から 10ヶ月までの月齢別に見て，全期間を通して育児適応に最も強く影響するものは「育児行動に対する苦痛」であると述べている．このことより，育児に対して苦痛と感じることを少なくすることが育児肯定感を促進すると述べている．また，「育児行動に対する苦痛」に対しては「母乳栄養の確立」と「情緒的支援ネットワークの認知」に強い関連がみられていたとの報告から，母乳育児，情緒的支援についての視点を持つことの重要性が示唆された．

産褥期や育児期のサポートについて，南[8] の研究によれば，ソーシャルサポートの重要性は 1960 年代から指摘されており，日本の看護界でもノーバックのソーシャルサポート尺度を使用した研究が 1980 年代初頭からされるようになった．ソーシャルサポートの定義に関しては様々な見解があるが，心理学用語として一般的に使われている定義は，道具的（手段的）サポート（問題解決のための資源や情報を与える働きかけ）と，情緒的サポート（勇気づけたり，ただそばにいてあげるなど情緒面への働きかけ）の 2 種類に分類されている．育児期のソーシャルサポートに関する研究は，1990 年あたりから報告されてきており，金岡[9] らや，宮内[10] による，夫の援助に対する満足感と育児肯定感との関連や，大藪[11] は，夫婦関係と母親の育児満

足感との関連，新道[12]は，実母，夫，友人からのサポートが母親の育児肯定感情に大きく影響をもたらすと述べている．金岡[13]のソーシャルサポートに関する研究によれば，情緒的支援ネットワークについては全年齢（4ヶ月～3歳6ヶ月）の母親にとって育児否定的感情とは負の相関があり，特定的自己効力感とは正の相関があることを明らかにしている．しかし1ヶ月～12ヶ月の月齢間比較の産褥育児肯定感の変化を研究したものは少ない．

以上のことより，産後の母親が育児肯定感を速やかに持つことができ，維持，促進する為の手がかりを得るために，本研究では育児行動への苦痛内容を把握することが急務である．

Ⅱ．研究目的

産後1ヶ月から12ヶ月の児を持つ母親が抱いている，産褥育児肯定感と月齢別育児行動への苦痛についての実態とその関連性について明らかにする．

Ⅲ．研究方法

1．研究デザイン

量的研究，横断的調査．

2．研究対象

A県内にあるA産科クリニックを退院した母親を対象とした．正期産（妊娠37週0日以上）での出産であること，出生児の体重が2,500g以上であること，児の予後の良好なこと，シングルマザーではないことを対象とした．

3．研究対象者への研究依頼方法

A産科クリニックで出産した産後1ヶ月～12ヶ月の育児中の母親に電話にて質問紙調査に対する協力依頼の確認をした．同意者に説明書と質問紙と返信用封筒を郵送し，質問紙の郵送回収をもって本研究の最終的な同意を得られた母親とした．

4．データ収集期間

平成28（2016）年9月～10月．

5．データの収集内容

年齢，今回が何人目の出産か，出産様式，身近な育児支援者，里帰りの有無，経腟分娩所要時間，児の在胎週数，出生児の体重，現在の月齢，育児行動への苦痛についての質問（16問）をした．

島田ら[14-16]が改訂した「産褥育児生活肯定感尺度，第3版」の使用許可を得て，産褥育児生活肯定感尺度（以後産褥育児肯定感とする）の項目を質問した．

6．データ分析方法

育児期（産後1～12ヶ月）については，4ヶ月ごとの3群（1～4ヶ月, 5～8ヶ月, 9～12ヶ月）とし，月齢別変化を比較した．

無記名自記式質問紙調査による記述統計量の算出を行った．産褥育児肯定感の各因子と月齢群との関係を分析した．分析は一元配置分散分析をした．その後の多重比較にはTukey HSD法を使用した．また，産褥育児肯定感と育児行動への苦痛の高低群との有意差があるかを把握するため，育児行動への苦痛と感じる程度を5段階（1全くない，2あまりない，3どちらともいえない，4ややある，5とてもある）で回

答したデータを，得点化し平均点で 2 群に分けた．平均点以上を高い群，平均点未満を低い群とした. 産褥育児肯定感の点数を検定変数とし，育児行動への苦痛の 2 群をグループ化変数として *t* 検定を行った.

検定にあたり Shapiro-Wilk test にて，正規性の確認を行いパラメトリック検定を採用した．分析は SPSSver.22 for windows を用いた．有意水準は 5 ％未満とした.

７．用語の操作的定義

１）産褥育児肯定感

島田[17] によれば，産褥期の母親が新たな生活に適応していく過程において，自己の育児を中心とした生活に対して抱く肯定的感情の程度を知るための尺度として開発した尺度である．その構成要素は，第 1 因子夫のサポートに対する認識 5 項目，第 2 因子母親としての自信と肯定感 8 項目，第 3 因子生活適応 6 項目，第 4 因子夫以外のサポートの認識 4 項目，この島田の産褥育児肯定感の質問項目が本研究の内容と一致する．しかし，本研究の対象は 12ヶ月にわたるため，助産師基礎教育に従い，産褥を産後の全身の回復や排卵による次の妊娠の可能性を考慮すると，助産学の観点からは 12ヶ月と長期にとらえることが望ましいとしている．職業生活を開始している対象も含む．このことより産褥育児肯定感を「新たな生活に適応する過程にある褥婦・母親が抱く，育児に焦点を当てた自己に対する肯定感情」と定義した.

２）育児行動への苦痛

広辞苑（第六版）によれば，苦痛とは「精神や肉体が感ずる苦しみや痛み」とある．斉藤[18] の先行研究によれば, 育児の精神的な苦痛には, 自分のペースの乱れや思ったように育児ができない自責の気持ちや不安，夫や家族に対する期待との葛藤，身体への負担によるストレスなどを挙げている．苦痛に思う内容や度合いは人それぞれであるが，本人が苦痛と感じていることが基準であるため，個人レベルの意味も含めて本研究では，育児にかかわる行動や生活に対して精神的，肉体的に母親が苦痛とまで感じていることを育児行動への苦痛と定義した.

８．倫理的配慮と利益相反

アンケートは無記名とし，研究依頼文には本研究の目的，得られたデータは本研究以外では使用しないこと，参加は自由意思に基づくものとすること，不参加による不利益はないこと，いつでも参加の同意を撤回できることと，郵送後は個人の特定ができないために撤回が不可能なこと，アンケートの記述データは個人を特定されることはなく，研究終了後 5 年間が経過したらシュレッダーにて破棄すること，保管方法は常時鍵を掛けてあることを明示した.

尚，本研究を行うに当たり，高崎健康福祉大学研究倫理委員会（高健大倫第 2823 号），及び A 施設院長の承認を得た上で実施した.

尚，本研究について利益相反はない.

Ⅳ．結果

１．属性

配布数 212 名，回収数 161 名（68.3％），有効回答 144 名（67.9％）であった.

平均年齢は 31.8（SD±3.9）歳であり，初産婦の平均年齢は 30.6（SD±4.0）歳，経産婦の平均年齢は 33.0（SD±3.5）歳であった．初産婦は 73 名（50.7％），経産婦は 71 名（49.3％）であった（表 1 参照）.

表１　対象者の属性（全体・初産婦・経産婦）　N＝144

項目		全体 N＝144		初産婦 n＝73		経産婦 n＝71	
		人数	（%）	人数	（%）	人数	（%）
年代	平均	31.8 (SD3.9)		30.6 (SD4.0)		33 (SD3.5)	
	20 歳代	43	(29.9)	31	(42.5)	12	(16.9)
	30 歳代	98	(68.0)	40	(54.8)	58	(81.7)
	40 歳代	3	(2.1)	2	(2.7)	1	(1.4)
初経産別	初産婦	73	(50.7)	73	(100.0)		
	経産婦	71	(49.3)			71	(100.0)
出産方法	経腟分娩	118	(81.9)	56	(76.7)	62	(87.3)
	帝王切開	26	(18.1)	17	(23.3)	9	(12.7)
育児支援者	夫	97	(67.4)	51	(69.8)	46	(64.8)
	夫の親	5	(3.5)	1	(1.4)	4	(5.6)
	自分の親	41	(28.4)	21	(28.8)	20	(28.2)
	兄弟親戚	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)
	その他	1	(0.7)	0	(0.0)	1	(1.4)
	支援者無	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)
育児行動への苦痛	とてもある	2	(1.4)	2	(2.7)	0	(0.0)
	ややある	59	(41.0)	32	(43.8)	27	(38.0)
	どちらともいえない	25	(17.4)	11	(15.1)	14	(19.7)
	あまりない	47	(32.6)	23	(31.5)	24	(33.8)
	全くない	11	(7.6)	5	(6.9)	6	(8.5)
現在の月齢	1～4ヶ月	59	(41.0)	26	(35.6)	33	(46.5)
	5～8ヶ月	49	(34.0)	31	(42.5)	18	(25.3)
	9～12ヶ月	36	(25.0)	16	(21.9)	20	(28.2)

表２　分娩に関する情報　N＝144

		項目全体 N＝144	初産婦 n＝73	経産婦 n＝71
在胎週数	平均	38 (5) 週	38 (5) 週	38 (4) 週
児の出生体重	平均	3061.4 (SD337.8) g	3026.0 (SD330.8) g	3096.7 (SD343.4) g
経腟分娩所要時間	平均	405.1 分	499.1 分	311.1 分
里帰り期間	平均	7 週間 3 日	7 週間 2 日	7 週間 4 日

２．分娩に関する情報

分娩に関して，在胎週数の平均は 38 週 5 日，児の出生体重の平均は 3061.4（SD±337.8）g であった．

分娩所要時間の平均は 405.1 分，初産婦は 499.1 分，経産婦は 311.1 分であり，その差は 188 分と約 3 時間ほど初産婦の方が時間を要している．里帰り期間は平均 7 週間と 3 日であった（表 2 参照）．

３．育児行動への苦痛に思うことの内容

月齢ごとに集計した結果，最も多かった苦痛の内容は，1～4ヶ月では授乳に関する事が 12 名（20.3%），自身の体調のこと，育児に不慣れなこと，夫や家庭との関係が続いていた．5～8ヶ月では離乳食に関することが 7 名（14.3%），自身の体調のことが続いていた．9～12ヶ月でも離乳食に関することが 7 名（19.4%）であった．経済的なこと 5 名（13.9%），孤独感 4 名（11.1%）

表３　月齢別育児行動への苦痛内容　　N＝144

育児行動への苦痛内容	1～4ヶ月 n＝59 n （%）	5～8ヶ月 n＝49 n （%）	9～12ヶ月 n＝36 n （%）
1）全くない	4（ 6.8）	6（12.2）	1（ 2.8）
2）授乳に関すること	12（20.3）	1（ 2.0）	2（ 5.6）
3）離乳食に関すること	2（ 3.4）	7（14.3）	7（19.4）
4）おむつ、排泄にかかわること	0（ 0.0）	1（ 2.0）	0（ 0.0）
5）お風呂に入れること	0（ 0.0）	3（ 6.1）	1（ 2.8）
6）あやすこと	2（ 3.4）	1（ 2.0）	0（ 0.0）
7）抱っこ	2（ 3.4）	1（ 2.0）	2（ 5.6）
8）子どもの性格に関すること	2（ 3.4）	3（ 6.1）	1（ 2.8）
9）子どもの体に関すること	1（ 1.7）	0（ 0.0）	2（ 5.6）
10）あなたの体調のこと	4（ 6.8）	6（12.2）	3（ 8.3）
11）孤独感	1（ 1.7）	3（ 6.1）	4（11.1）
12）育児に慣れないこと	4（ 6.8）	2（ 4.1）	0（ 0.0）
13）周りの気遣いがないこと	1（ 1.7）	1（ 2.0）	0（ 0.0）
14）経済的なこと	1（ 1.7）	1（ 2.0）	5（13.9）
15）夫や家族との関係	4（ 6.8）	2（ 4.1）	2（ 5.6）
16）その他	19（32.2）	11（22.4）	6（16.7）

表４　産褥育児肯定感と月齢の関係　　N＝144

因　　子	月齢	n	平均値	SD	F 値	有意確率
第１　夫のサポートに対する認識	1～ 4ヶ月	59	19.8	3.8	3.840	.024 ＊
	5～ 8ヶ月	49	20.0	3.5		
	9～12ヶ月	36	18.0	3.3		
第２　母親としての自信と肯定感	1～ 4ヶ月	59	27.8	3.5	1.460	.235
	5～ 8ヶ月	49	29.0	3.4		
	9～12ヶ月	36	28.8	3.6		
第３　生活適応	1～ 4ヶ月	59	15.2	3.7	0.348	.706
	5～ 8ヶ月	49	14.5	4.4		
	9～12ヶ月	36	14.8	4.5		
第４　夫以外のサポートの認識	1～ 4ヶ月	59	15.9	3.2	1.494	.228
	5～ 8ヶ月	49	16.7	3.0		
	9～12ヶ月	36	15.7	2.6		

*p＜.05　**p＜.01　***p＜.001

が続いていた. 一方,「育児行動への苦痛はない」と回答した母親は1～4ヶ月は4名（6.8%），5～8ヶ月は6名（12.2%）9～12ヶ月は1名（2.8%）であった（表3参照）.

４．月齢別産褥育児肯定感の変化の比較

第1～4因子の信頼性（Chronbach のα係数）は0.85が確認された.

出産後1ヶ月から12ヶ月までの間を4ヶ月ごとに3群に分け，月齢による育児肯定感の得点を比較するため，この4つの因子の各得点を従属変数とし，月齢別に分けた3群を因子として一元配置分散分析を行った．産褥育児肯定感の各因子と月齢群にて有意差の認められたのは第1因子「夫のサポートに対する認識」（p＝.024）であった（表4参照）.

表５　産褥育児肯定感質問項目別比較　N＝144

項目	月齢	n	平均値	有意確率	
夫は私の気持ちを理解してくれる	１～４ヶ月	59	3.7	.031*	
	５～８ヶ月	49	3.6		
	９～12ヶ月	36	3.3		
夫は子どもの世話をよくしてくれる	１～４ヶ月	59	4.3		.014*
	５～８ヶ月	49	4.2	.046*	
	９～12ヶ月	36	3.8		

*p＜.05　**p＜.01　***p＜.001

表６　育児行動への苦痛（高低群・１～４ヶ月）　n＝59

因子	項　目	育児苦痛高低	n	平均値	SD	t	有意確率（両側）
第１	夫のサポートに対する認識	苦痛低い	27	21.2	3.4	2.702	.009**
		苦痛高い	32	18.7	3.8		
第２	母親としての自信と肯定感	苦痛低い	27	28.9	3.1	2.190	.032*
		苦痛高い	32	27.0	3.5		
第３	生活適応	苦痛低い	27	16.9	3.9	3.451	.001**
		苦痛高い	32	13.8	2.9		
第４	夫以外のサポートの認識	苦痛低い	27	16.5	3.1	1.445	.154
		苦痛高い	32	15.3	3.2		

*p＜.05　**p＜.01　***p＜.001

５．月齢群と産褥育児肯定感尺度の質問項目との比較

産褥育児肯定感の各因子と月齢群にて有意差の認められた第１因子「夫のサポートに対する認識」の各項目と月齢群の関連をさらに分析するため，Tukey HSD 法による多重比較を行った．

第１因子の「夫は私の気持ちを理解してくれる」は，１～4ヶ月と９～12ヶ月の間で有意差（p＝.031）が認められ，９～12ヶ月群の平均値は低かった．また,「夫は子どもの世話をよくしてくれる」の項目は５～8ヶ月と９～12ヶ月で有意差（p＝.046）が認められ，１～4ヶ月群と９～12ヶ月群で有意差（p＝.014）が認められ，９～12ヶ月群の平均値が低かった（表５参照）．

６．産褥育児肯定感と月齢別にみた育児行動への苦痛の高低群との関連

育児行動への苦痛についての総得点は 426 点で, 平均点 213 点をもって得点が高い方を高群, 低い群を低群とした．

月齢１～4ヶ月の産褥育児肯定感と育児行動への苦痛の高低群との関連は，第１因子「夫のサポートに対する認識」と育児行動への苦痛（高低群）での有意差（t＝2.702 p＝.009）が認められ，育児行動への苦痛の低い群は「夫のサポートに対する認識」の平均値が高い．第２因子「母親としての自信と肯定感」と育児行動への苦痛（高低群）との関連の有意差（t＝2.190 p＝.032）が認められた．育児行動への苦痛が低い群の方が母親としての自信と肯定感の平均値が高い．第３因子「生活適応」と育児行動への苦痛（高低群）との関連の有意差（t＝3.451

表７　育児行動への苦痛（高低群・５～８ヶ月）　　n＝49

因子	項　　目	育児苦痛高低	n	平均値	SD	t	有意確率（両側）
第１	夫のサポートに対する認識	苦痛低い	20	20.3	3.0	0.494	.623
		苦痛高い	29	19.8	3.8		
第２	母親としての自信と肯定感	苦痛低い	20	30.3	3.2	2.241	.029*
		苦痛高い	29	28.1	3.3		
第３	生活適応	苦痛低い	20	17.9	3.7	5.733	.000***
		苦痛高い	29	12.2	3.2		
第４	夫以外のサポートの認識	苦痛低い	20	17.1	3.4	0.771	.445
		苦痛高い	29	16.4	2.8		

*p＜.05　**p＜.01　***p＜.001

表８　育児行動への苦痛（高低群・９～12ヶ月）　　n＝36

因子	項　　目	育児苦痛高低	n	平均値	SD	t	有意確率（両側）
第１	夫のサポートに対する認識	苦痛低い	11	19.4	3.4	1.667	.105
		苦痛高い	25	17.4	3.2		
第２	母親としての自信と肯定感	苦痛低い	11	29.5	3.0	1.062	.296
		苦痛高い	25	28.2	3.8		
第３	生活適応	苦痛低い	11	17.5	4.9	2.586	.014*
		苦痛高い	25	13.6	3.8		
第４	夫以外のサポートの認識	苦痛低い	11	16.1	3.2	0.639	.527
		苦痛高い	25	15.5	2.4		

*p＜.05　**p＜.01　***p＜.001

p＝.001）が認められた．育児苦痛の低い群が生活適応の平均値が高い．第４因子「夫以外のサポートの認識」と育児行動への苦痛（高低群）との関連は，有意差は認められなかった（表６参照）．

月齢５～８ヶ月の産褥育児肯定感と育児行動への苦痛の高低群との関連は，第２因子「母親としての自信と肯定感」と育児行動への苦痛（高低群）との関連の有意差（t＝2.241　p＝.029）が認められた．育児行動への苦痛が低い群は母親としての自信と肯定感の平均値が高い．第３因子「生活適応」と育児行動への苦痛（高低群）との関連の有意差（t＝5.733　p＝.000）が認められた．育児行動への苦痛が低い群は生活適応の平均値が高い（表７参照）．

月齢９～12ヶ月の産褥育児肯定感と育児行動への苦痛の高低群との関連は，第３因子「生活適応」と育児行動への苦痛（高低群）との関連の有意差（t＝2.586 p＝.014）が認められた．育児行動への苦痛の低い群は生活適応の平均値が高い（表８参照）．

Ⅴ．考察

１．月齢別育児行動への苦痛

月齢別の中で，９～12ヶ月群の「離乳食に関する事」,「経済的なこと」,「孤独感」が育児行動への苦痛の内容としてあげられた．ほかの月齢群よりも「孤独感」と答えたものが多かった．この月齢では，はいはいや，つかまり立ち，不安

定ながらも歩行が始まり，自我の発達も見られ，目の離せない時期である．厚生労働省[19]の「雇用均等基本調査」により，男性の育児休暇取得率は平成27年（2015）では8%にとどまっている現状や，坂東[20]の「パタニティーブルー」と呼ばれる父親としての心理的動揺や精神的症状についての研究報告にもあるように，夫に対する育児参加を促す援助には，社会的な背景や，夫自身が父親としての自分をどう受け止めているかなども考慮していく必要がある．

Rubin[21]は，女性がもとの自分らしさ，完全でかけたところがなく，機能的でかつ周囲によく適応できていると感じられるようになるまでには出産から9ヶ月かかる．それは，身体の回復だけでなく，子どもを自分とは別の存在として認め，母性性が完成され，自分自身を再び取り戻したと思えるのには8～9ヶ月かかると述べている．我部山[22]の産後の育児に関する研究では「育児に慣れた時期」に対して遅い群の初産婦で9ヶ月以上，経産婦で6ヶ月以上と報告している．母親自身の育児に慣れたという感覚に影響する項目としては，自己の自信や価値観を示す自己概念，夫との関係性，子育てが楽しいなどの育児に対する因子が密接に関連している．

9～12ヶ月群の育児行動への苦痛では「離乳食に関する事」，「経済的なこと」，「孤独感」があげられた．月齢が進むことで育児は慣れ，育児への苦痛より経済的不安や心の問題が示された．そして，単に育児に慣れることが育児の大変さの軽減につながるわけではなく，勤労婦人にとっては職場復帰を控えての不安や，保育園さがしに悩んだり，夫が妻子の為に経済的余裕を求めて育児より，仕事に時間を費やし，職種により残業や夜勤業務に勢をだし家庭にいる時間が短くなったりして育児参加やサポートが減少するのではないかと，様々な要因はあげられるが，今回はさらなる追跡調査をしていない．

以上より，育児行動への苦痛内容は子どもの発達段階に応じて変化しており，育児に慣れてきても母親に対する夫の育児参加やサポートは常に必要とされていることが示唆された．

2．夫のサポートに対する認識

産褥育児肯定感の各因子と月齢群にて有意差の認められたのは第1因子「夫のサポートに対する認識」（p=.024）であった．月齢群と産褥育児肯定感の関連では，第1因子「夫のサポートに対する認識」が月齢9～12ヶ月群は有意に低下する事が認められた．さらに月齢と項目では「夫は私の気持ちを理解してくれる」，「夫は子どもの世話をよくしてくれる」の2つに有意差が確認された．この2つの項目も月齢9～12ヶ月群は有意に低下する事が認められた．武田[23]は，月齢が進むと「怒り - 敵意」は直接子どもに対するものではなく，夫の手伝いや，疲労に向けられているものであったことを示した．我部山[24]は「夫との親密度が良好であるほど母親が育児に慣れた時期が早かった」と述べている．夫との親密度とは，夫の育児支援や，妻への身体的，心理的サポートを含む包括的相互作用から形成されるとのことである．また，花沢[25]は，「父性は我が子との関わりのうちに経験的に生成するもの」と述べている．

夫のサポートに対する認識について，母親の自己概念や自尊感情，性役割志向性の高低感や，対処能力も含めた育児力も月齢が進むと備わるという傾向がみられる．ところが，実は夫との関係性が影響していることが示された．

以上より，月齢別産褥育児肯定感の変化に対

する支援として，特に9～12ヶ月群は夫の育児参加への減少がおきていることを踏まえて心理的サポートを考慮していくことが必要である．

3．産褥育児肯定感と生活適応

産褥育児肯定感と月齢別育児行動への苦痛（高低群）との関連を分析したところ，産褥育児肯定感の第3因子「生活適応」と産褥育児肯定感に対し，すべての月齢群に有意差が認められ，育児行動への苦痛の低い群は，産褥育児肯定感の第3因子「生活適応」と，産褥育児肯定感の平均値が高かった．このことにより，育児肯定感は育児行動への苦痛に大きく影響を受けていることが明らかとなった．そして特に第3因子の「生活適応」について考慮していくことが必要である．

産褥育児肯定感尺度の第3因子「生活適応」は育児生活に対して出産後の自己の生活に対する認識を示すものである．質問内容は家事，寝不足，イライラ，疲労，育児をしながらの生活と育児生活をしていれば，誰でもが感じることであり，当然な内容であるがゆえに，周りからは見過ごされる傾向がある．毎日の些細な苦痛が長期間に渡り持続することになり，対象者にとっては慢性的な苦痛となり得る．苦痛内容が明確になっても全てが軽減できるわけではない．

生活適応の中でも何が母親にとっての子育観を助成しているのか検討の必要性があった．

その中でも母乳育児が順調になれば育児苦痛が低く母性の育成に寄与するが，人工栄養が否定的自己概念を招くこともあり，今回は栄養についての調査が不足していたことは否めない．里帰り期間は平均7週間3日であったが，里帰り先の状況について詳細に調査を行っていないため，実母が勤労の場合は期待しているような援助があるのか不明である．サポート体制については資源の活用も考慮していくことである．

以上より，周りの支援を受けられるように工夫すること，ソーシャルサポートの利用，同じく育児中の母親同士の交流等が促進できるように環境を整えることも必要である．

Ⅵ．結論

1．産褥育児肯定感と月齢群との関係では，月齢9～12ヶ月群で，夫によるサポートへの認識が最も低下していたことから，育児支援は，月齢が進んだ9～12ヶ月の母親へも育児支援策を講じることが必要である．

2．産褥育児肯定感と育児行動への苦痛（高低群）との月齢群との関連では，全月齢群において育児行動への苦痛の低群は，「生活適応」への順応が高い事が認められた．

Ⅶ．本研究の限界と課題

本研究では，一施設の産後1ヶ月より12ヶ月の児を持つ母親のデータであり，対象者数も144名であった．産後12ヶ月迄の4ヶ月間毎の肯定感情の変化を確認できたのみで，一人一人の1年間を追跡した研究ではないので全体が概観できたのみであり，毎月の変化と個人の苦痛については明確にはできなかったことは限界である．今後は一人一人の肯定感情の変化について着目し，さらに検討しポイントを絞った育児支援への示唆を得ることが課題である．

引用文献

1）厚生労働省．人口動態統計（2017）http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1.html，（参照 2018-04-03）
2）厚生労働省人口動態統計「出生順位別にみた年次別母の平均年齢」http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1a.html（参照 2016-12-25）
3）服部祥子，原田正文．乳幼児の心身発達と環境．名古屋大学出版社，1991，p.12-15.
4）大日向雅美．育児に伴う母親の不安．小児看護．1989，12(4)，p.415-420.
5）斉藤寿江．褥婦の育児生活肯定感を測定する質問紙の作成．第 12 回日本助産学会学術集会集録，1998，p.90-93.
6）Reva Rubin 著，新道幸恵，後藤桂子訳．ルヴァ・ルービン母性論―母性の主観的体験―．医学書院，1997，p.114.
7）田中和子．育児適応に影響を与える要因の検討―母性衛生，2007，47(4)，p.554-561.
8）南裕子他．ノーバック・ソーシャルサポート質問紙日本版における構成概念の妥当性の分析．日本看護科学学会誌，1990，10(1)，p.52-62.
9）金岡緑，藤田大輔．乳幼児をもつ母親の特性的自己効力感及びソーシャルサポートと育児に対する不定的感情の関係性．厚生の指標，2002，49(6)，p.22-29.
10）宮内清子．産褥期の母親の育児に対する気持ちに影響する要因―妊娠確定時からの継続調査を通して―．愛媛県立医療技術短期大学紀要，1997，10，p.109-119.
11）大藪泰．乳児を持つ母親の育児満足感の形成要因Ⅰ―4 か月児と 10 か月児の母親の比較―．小児保健研究，1994，53(6)，p.826-834.
12）新道幸恵．産褥早期の褥婦の母性意識に関与する因子について．母性衛生，1985，26(2)，p.208-213.
13）前掲書 9)，p.22-29.
14）島田真理恵，恵美須文江，長岡由紀子他．産褥育児生活肯定感尺度改定に関する研究．日本助産学会誌，2003，16(2)，p.36-45.
15）島田真理恵．産褥 1 か月～6 か月における褥婦の育児生活肯定感情の変化―対象全体の変化，出産経験別の変化に焦点を当てて―．日本助産学会誌，2003，16(3)，p.184-185.
16）島田真理恵，佐藤沙織．「産褥期育児生活肯定感尺度第 3 版」作成の試み．日本助産学会誌，2015，28(3)，p.520.
17）前掲書 16)，p.520.
18）斉藤寿江．褥婦の育児生活肯定感を測定する質問紙の作成．第 12 回日本助産学会学術集会集録，1998，p.90-93.
19）厚生労働省人口動態統計「雇用均等基本調査」（2015）http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1a.html（参照 2016-12-25）
20）坂東正巳．パタニティーブルーの精神的・心理的視点 我が児の誕生に伴う父親の心理的動揺と変化に関する実態調査．関西医療大学紀要，2012，6，p.139-146.
21）前掲書 6)，p.148.
22）我部山キヨ子．産後の育児に関する研究―育児適応を促進・遅延する因子―．母性衛生，2002，43(2)，p.314-320.
23）武田江里子．18ヶ月児を持つ母親の「怒り―敵意」に関する要因および胎児感情への影響―妊娠末期から産後 18ヶ月までの日本版 POMS による追跡調査から―．日本助産学会誌，2009，23，p.196-207.
24）前掲書 22)，p.314-320.
25）花沢成一．母性心理学．医学書院，1999，p.210.

Abstract

Purpose: Identifying the relationship between postpartum positive feelings toward childrearing that mothers have and actual conditions of distress from childrearing activities by age in the months of the postpartum period from one to twelve months.

Methods: Mothers leaving obstetric clinic A were asked to answer to items measuring to what degree they bore positive feelings toward childrearing postpartum and to describe their distress regarding childrearing activities.　They were asked to return the anonymous, self-administered questionnaire by post. The differences in responses between months postpartum (1-4 months, 5-8 months, 9-12 months) were analyzed using one-way analysis of variance.　The Tukey HSD method was used for multiple comparisons.　The significance level was set below 5％ .

The study was approved by the Takasaki University of Health and Welfare Research Ethics Committee (TUHWREC No. 2823) and the director of the clinic A.

Results: 144 valid responses (valid response rate 67.9％) were analyzed.　The average age of respondents was 31.8 (SD ± 3.9). 73 (50.7％) respondents were primiparae, and 71 (49.3％) were multiparae.

In regard to distress felt toward rearing activities, the results were totaled by age in month showing that the largest amount of distress observed was related to feeding in the 1-4 months group, weaning food in the 5-8 months group, and weaning food again in 9-12 month-group.

From the results of one-way analysis of variance, significant difference (p=.024) was found in factor 1, “Recognition for support from their husbands” among factors of the postpartum positive feelings toward childrearing and postpartum groups by month.　In order to further analyze factor 1, in which a significant difference was observed, multiple comparisons by the Tukey HSD method were conducted. As a result, there was a significant difference (p=.031) between the 1-4 months group and the 9-12 months group, and the average value of the 9-12 months group was lower.

Conclusion: In regard to the postpartum positive feelings toward childrearing among months postpartum groups, the 9-12 months group showed lowest in regard to recognition for support from their husbands. In regard to childrearing support, the need for measures to support mothers in childrearing beyond the postpartum period (9-12 months) was suggested.

Key words: mother, postpartum positive feelings toward childrearing, child rearing activities, distress of childrearing